

## 中世後期の地域寺院である観心寺の支配

大石雅章

(キーワード：観心寺、膝下荘園、守護権力、学侶、禅衆)

### はじめに

中世顕密寺院勢力の研究は前期に集中し、中世後期の宗教勢力の研究は、新興の一向宗や法華宗が研究にかたより、顕密寺院についての研究はほとんどなされていない状況である。荘園制支配体制が解体していく中世後期において、地域の顕密寺院と社会との関わりがいかに変化し、また寺院組織そのものがいかに変わるのか、その実態を語る研究はほとんどなかったといえよう。

そこで、本稿では、中世後期の荘園制支配体制が解体するなかで、中央権門寺院の末寺として存在してきた地域寺院が、いかに変化していくのかを検討する。すでに、地域社会の諸勢力の自立的傾向を背景に、地域社会と地縁・血縁で結びつく寺院僧衆の存在が、寺院組織や宗教活動に多大なる影響を与え、根来寺のように独自の武力を形成し、強力な地域領主へと成長した寺院の研究も存在する<sup>1)</sup>。そこには、中央支配権力の後退に伴う支配体制の動揺を背景に、新興勢力を結集する地域寺院の姿がある。

しかし、すべての地域寺院がそのような道を辿るかといえそうとも言えない。本稿では根来寺と同じ和泉・葛城山系に存在する河内国観心寺を題材に、根来寺のように守護権力に対抗し得る地域支配権を有する地域寺院へと成長しなかった寺院の実態に迫る<sup>2)</sup>。

### 1 中世後期の観心寺郷（観心寺荘）の諸職の集積

中世後期の観心寺領の中核をなすのは、いくつかの寄進田畠を除けば、石見川沿いの鳩原郷・太井郷・小深郷・石見川郷・小西見郷の五郷と天見川沿いの上岩瀬郷・下岩瀬郷からなる観心寺膝下の七郷と、観心寺門前の寺元郷であり、もはや遠方の寺領は存在しない。

中世後期のこれら膝下郷で構成される観心寺領が内実どのようなものであるのか、その点から地域寺院観心寺の寺領の特徴にせまる。観心寺七郷・寺元郷の名が現れ、それらの寺領の安堵に関する初見史料は、元亨2年(1322)「太政権僧正坊政所下文」<sup>3)</sup>による観心寺領岩瀬・小西見両郷の下司職補任状である。この下文の存在は、本寺東寺による末寺観心寺領に対する支配権の安堵システムに基づくものであろう。南北朝期には、観心寺は、年欠4月30日「後醍醐天皇綸旨」に「当寺為 勅願寺、天下静謐之間、可令修如意輪観音法者」<sup>4)</sup>とあって、南朝方の勅願寺であった。このように観心寺は近隣の天野山金剛寺ともに南朝勢力との関係が深く、「後村上天皇綸旨」<sup>5)</sup>、「楠木正行国宣」<sup>6)</sup>等によって寺領の安堵がなされている。

しかし、明德3年(1392)の南北朝合体以後の室町時代には、幕府権力による安堵へと変わり、本寺からの安堵や支配に関する文書は全く存在しない。室町幕府権力からの安堵の初見は、応永14年(1407)「室町幕府御教書」<sup>7)</sup>である。

#### 史料1

河内国観心寺雑掌申観心寺七郷地頭領家両職半分事、早任近年知行之例、可被沙汰付当寺之由、所被仰下也、仍執達如件、

応永十四年六月五日

沙弥(斯波義重)(花押)

畠山修理大夫入道殿(畠山満則)

史料1の「室町幕府御教書」は、室町幕府将軍が観心寺による近年の知行を踏まえて、観心寺七郷の「地頭・領家両職半分」を安堵したものである。この「室町幕府御教書」を受け、守護畠山満則は守護代遊佐長護宛に遵行を命ずる史料2を発給し、さらにそれを得た守護代遊佐長護は、現地の担当者菱木盛阿に遵行を命ずる史料3

を発給した。

史料 2

河内国観心寺雑掌申観心寺七郷地頭領家両職半分事、任御教書之旨、可沙汰付当寺雑掌之状如件、  
応永十四年六月九日 (花押) (畠山満則)  
遊佐河内入道殿 (明叟)<sup>8)</sup>

史料 3

河内国観心寺雑掌申観心寺七郷地頭領家両職半分事、任六月九日御施行之旨、可沙汰渡当寺雑掌之状如件  
(押紙)「遊佐明叟」  
応永十四年九月二日 沙弥 (花押)  
菱木掃部助入道殿 (盛阿)<sup>9)</sup>

観心寺は、観心寺七郷に対して、地頭職・領家職を所持し、領主として支配していた。さらに膝下の寺領に対して、以下の史料 4・史料 9 にみられるように地頭職・領家職以外の諸職や緒権限を集積しようと努めていた。

まず、応永 24 年 (1417) には、河内守護畠山満家から「観心寺庄段銭已下臨時課役并検断等等」が免許され、その守護代・現地担当者を介して遵行がなされている。

史料 4

河内国観心寺領、同国観心寺庄段銭已下臨時課役并検断等事、所令免許也、可有存知其旨之状如件、  
応永廿四年八月九月 沙弥 (花押) (畠山道端)  
観心寺衆僧御中<sup>10)</sup>

史料 5

当国観心寺領、同国観心寺庄段銭以下臨時課役并検断等事、可令免許之由、今月九日所被成御判也、可令存知之状如件、  
応永廿四年八月十二日 左衛門尉 (花押) (遊佐国盛)  
菱木掃部入道殿 (盛阿)<sup>11)</sup>

史料 6

当国観心寺領、同観心寺庄段銭以下臨時課役并検断等事、可免許之由、被仰下候、可有存知候、恐々謹言、  
応永廿四  
八月廿七日 盛阿 (花押)  
南条入道殿<sup>12)</sup>

史料 7

観心寺領、同庄段銭以下、就臨時課役并検断等、如此御状候、得心申候、恐々謹言  
(押紙)「菱木七郎左衛門尉」  
十一月廿五日 慶盛 (花押)  
観心寺衆徒御中<sup>13)</sup>

段銭已下臨時課役并検断等の免除の対象となった観心寺庄は、永享 10 年 (1438) 11 月 15 日「畠山持国安堵状」に「河内国観心寺雑掌申、同国観心寺郷段銭已下臨時課役并検断等事、早任去応永廿四年八月九日免除之旨、可被全寺家領知之状如件」<sup>14)</sup>とあるように、観心寺郷と同じであり、観心寺七郷と寺元郷を指すものとみられる。

さらに、嘉吉 3 年 (1443) に観心寺は守護畠山持国から観心寺庄下司・公文両職の寄付を得ている。

史料 8

寄附 河内国観心寺  
同国観心寺庄下司公文両職事  
右、為祈禱料所、々令寄附之状如件  
嘉吉三年四月廿八日 沙弥 (花押) (畠山徳本)<sup>15)</sup>

史料 8 の寄進状よりも以前の嘉吉元年 (1441) 観心寺衆徒宛「岡村諍俊書状」には「当国観心寺領同国観心寺庄段銭以下臨時之課役検断并下司公文職七ヶ村預所職之事、可令免除之由被仰候、此旨可有存知候」<sup>16)</sup>とあって、観心寺は嘉吉元年に実質的に下司職・公文職の権利を得ていたとみられるが、寛正 2 年 (1461) 4 月 27 日観心寺衆僧宛「畠山義就安堵状」に「河内国観心寺領同国観心寺庄下司公文両職事、任去嘉吉三年四月廿八日寄進之状之旨、可被全知行之状如件」<sup>17)</sup>とあって、畠山義就による観心寺庄下司職・公文職の安堵は、嘉吉 3 年の守護畠山持国の寄進状を支証としてなされており、のちの延徳 3 年 (1491) 12 月 6 日「畠山基家安堵状」<sup>18)</sup>、永正元年

（1504）7月18日「畠山義英安堵状写」<sup>19)</sup>、大永3年（1523）3月18日「畠山義堯安堵状」<sup>20)</sup>においても「任去嘉吉三年四月廿八日寄進状之旨」と同じである。したがって観心寺庄下司職・公文職は、正式には嘉吉3年の守護畠山持国の寄進状によって得たものと考えるのが妥当であろう。

史料8の嘉吉3年（1443）4月28日の寄進状を受けて、遵行のために発給された同年4月晦日の猿倉正遵宛「西方国賢遵行状」<sup>21)</sup>では、

史料9

河内国観心寺領同国観心寺庄下司公文両職并七ヶ村預所職事、可有御寄進之由 今月廿八日所被成 御判也、可有存知之状如件、

（押紙）「西方殿クニ□□」

嘉吉三年卯月晦日

国賢（花押）

猿倉五郎左衛門入道殿（正遵）

とあって、下司職・公文職に併せて七ヶ村預所職が加わっている。そのことは、史料9を受けて発給された史料10の嘉吉3年（1443）5月13日「猿倉正遵書状」<sup>22)</sup>においても同じである。

史料10

河内国観心寺領同国観心寺庄下司公文両職并七ヶ村預所職事、依有御寄進、御判被成下之上者、得心申候也、恐々謹言、

嘉吉三

（押紙）「猿倉」

五月十三日

正遵（花押）

観心寺衆徒御中

このように、観心寺庄の下司職・公文職は、七ヶ村預所職と合わせて遵行された。七ヶ村預所職に関する河内守護からの寄進状は存在しないことから、預所職は室町期以前から観心寺が地頭職・領家職とともに所持していた所職とも考えられる。その場合、中世前期において本寺の荘園支配体制のもとで、末寺として所持していたものであろう。

以上、観心寺は、膝下の観心寺庄である寺元郷・観心寺七郷の荘園所職を集積し、室町幕府将軍からは地頭職・領家職の半分の安堵を受け、河内守護からは段銭已下臨時課役并検断の免除、下司職・公文職の寄付を受け、以前からの預所職を含めて、一円支配を目指していた。

さて、このような所職については、それぞれの給田を記した古帳があり、文安元年（1444）8月3日の「観心寺学侶等申状案」<sup>23)</sup>によれば、

史料11

（端裏書）

「内裏反銭之時西方殿様へ申状案」

就 造内裏御段銭之事、田数預御尋候、則以古帳之面、地頭領家下司公文職之分、令注進候、預御免除之様候者、別而可為御祈禱候也、恐惶謹言、

文安元

八月三日

観心寺学侶等

西方殿御宿所

とあって、地頭職・領家職・下司職・公文職の分の田数を書き上げた「古帳」に基づいて、観心寺七郷の造内裏御段銭の免除を願い出ている。

## 2 守護権力による観心寺郷の安堵

観心寺は、嘉吉3年の下司職・公文職の寄付を得て、観心寺庄（観心寺郷）の荘園所職の集積を完成するが、その安堵の保証は河内守護の畠山氏によってなされた。寛正2年（1461）の畠山義就による安堵の場合をみておきたい。なお、当時の河内守護は畠山政長であるが、実質的にこの地域を勢力下に治めていたのは畠山義就であった。

史料12

河内国観心寺領同国観心寺七郷地頭領家両職半分事、任代々支証并当知行之旨、領掌不可有相違之状如件、寛正貳年卯月廿七日

右衛門佐（花押）（畠山義就）

観心寺衆僧御中<sup>24)</sup>

## 史料13

河内国観心寺領同国観心寺庄下司公文兩職事, 任去嘉吉三年四月廿八日寄進之状之旨, 可被全知行之状如件,  
 寛正貳年卯月廿七日 右衛門佐 (花押) (畠山義就)  
 当寺衆僧御中<sup>25)</sup>

## 史料14

河内国観心寺雜掌申同国観心寺郷段錢以下臨時課役并檢断等事, 早任永享十年十一月十五日免除之旨, 可被全寺家領知之状如件,  
 寛正貳年卯月廿七日 右衛門佐 (花押) (畠山義就)  
 当寺衆僧御中<sup>26)</sup>

史料12・13・14から, 畠山義就によって, 「観心寺七郷地頭・領家兩職半分」「観心寺庄下司・公文兩職」「観心寺郷段錢以下臨時課役并檢断等の免除」の安堵がなされた。それと同時に, 以下の禁制が発給された。

## 史料15

## 禁制 観心寺

- 一 於寺家并寺領, 当方軍勢不可致乱妨狼藉事
- 一 同寺中, 剪取竹木事
- 一 於下僧者, 為寺家計不可有公方繕事

右, 此寺者, 為代々御祈禱之間, 此条々, 堅令禁制之處也, 若有違犯之輩者, 就名字注進, 可処罪科之状如件,

寛正貳年卯月廿七日 右衛門佐 (花押) (畠山義就)<sup>27)</sup>

以後, 観心寺に対して, 禁制と膝下寺領の安堵状が, 延徳三年(1491)12月6日には畠山基家より<sup>28)</sup>, 永正元年(1504)7月18日には畠山義英より<sup>29)</sup>, 大永三年(1523)3月18日には畠山義堯より<sup>30)</sup>, 天文6年(1537)11月13日には畠山在氏より<sup>31)</sup>, 天文18年(1549)6月4日には畠山尚誠より<sup>32)</sup>発給された。すなわち守護の代替わりごとに, 守護から観心寺に禁制・安堵状が発給され, 守護畠山氏によって観心寺膝下領の安堵体制が確立していた。

また, 観心寺は, 天文6年(1537)畠山在氏の禁制と安堵状, 天文18年(1549)畠山尚誠の禁制と安堵状を得るために, それぞれ札銭を遣わしている。

## 史料16

## 御屋形様繼目御判札銭注文

(畠山在氏)

参貫文	飯盛御屋形様小次郎殿
	(英房カ)
壱貫文	御屋形様御奉行
壱貫文	同
壱貫文	同
壱貫文	同
	平若狭守殿
	井口殿
	木沢中務殿
	木沢左近大夫入道殿<浮泛事也>
	(長政)
壱貫文	木沢左京亮殿
	(家利)
貳貫文	是者取繼
	窪田豊前入道殿
以上合拾貫文	

文殊院年預之時

天文六年<丁酉>十一月十三日

宥盛<sup>33)</sup>

史料中の< >は割注を示す。以下同じである。

## 史料17

## 繼目御判入目

貳貫文<御屋形様江札, 是者依有子細如此候, 後々ニ其儀ハ有間敷候>  
 壱貫文<奉行小柳七郎右衛門尉殿札>

壹貫文<奉行木沢修理亮へ礼>  
 五百文<家長へ礼, 是ハ伊賀之人也>  
 式百文<平豊前入道殿へ礼, 是ハ奉行にてはなし>  
 式百文<椎名近江殿へ礼>  
 式百文<筆者杭全殿礼>  
 式百文<小柳ノ内小嶋方へ礼, 無先々候へ共, 当座調シテ如此候>  
 百文 <木沢修理ノ内コマノ殿礼, 是モ同前ノ事也>

以上伍貫式百文

大御屋形様へ雑掌

樽壹荷 肴串柿壹把 白瓜一頭也

是者, 次郎殿様へ為御異見参候也,

天文十八季<己酉>六月<二二>日 月行事山本坊

使者宝蔵院<sup>34)</sup>

天文6年では、10貫文であったが、12年後の天文18年では5貫200文に減少しているが、守護の御屋形だけでなく、取り次ぎを始め守護方の有力武将など関係者にきめ細かく礼金が遣わされている。これ以外にも年欠の入目覚書が一通存在し、これら守護の安堵判物を得るためには、対価の礼銭が必要であった。

### 3 観心寺領膝下郷の規模

観心寺が、室町幕府・河内守護の保証のもとで、荘園諸職を集積し一円支配を実現した観心寺膝下郷の規模については、文亀元年(1501)12月8日「観心寺七郷田数算用日記」<sup>34)</sup>から中世末の状況を知ることができる。

史料18

(端裏書)

「<辛酉>文亀元年十二月八日田数日記 七郷分」

文亀元年<辛酉>十二月八日算用状

七郷田数之惣都合日記

二町五段小五十七歩<此内小五十七歩新>	上岩瀬郷
一町八段八十四歩<此内半五十四歩新>	下岩瀬郷
二町四段大卅歩<此内七反大十歩数>	鳩原郷
一町五段三百五十二歩<此内一反四十二歩新>	大井郷
二町九段百三歩<此内八反五十四歩新>	小西見郷
五段大四十九歩<此内一反小四十九歩新>	石見河
四段半三歩<此内二反大五十三歩新>	小深郷
一町一段小四十歩	下司給
八段四十歩	公文給
二段半	定使給

惣都合十四町六段卅八歩

辛酉十一月十日ニ御堀銭納ル時ノ指出ニハ、十四町六段百五十歩ト在之、同十二月八日指出ノ算用八百二十歩不足、

此外除分

二町	正作	一町百歩	諸闕所		
西ワタ	寺元	谷田	クキノタワ	ムカ井ノマエ	ハトノハラ
一所	五郎三郎	一所	次郎五郎	一所	助次郎
アヲホリ	ハトノハラ	平井ハトノ	原内石川	一色ウハタケ	
一所	衛門二郎	一所	浄祐	一段小	衛門次郎
下司給蓮蔵院地		下司給		下司給	

此外荒ト有ル分ヲハ不記、

定秀(花押)<sup>35)</sup>

観心寺七郷の田数は、14町6段38歩であり、同年11月10日の指出では14町6段150歩となっている。文亀元年頃は約14町6段の規模であったとみられる。これらの観心寺七郷からの収入を示す、ほぼ同時期のものとみられる年月日欠の「観心寺七郷納帳」を掲げる。

## 史料19

(端裏書)

「七郷段畝米高」

観心寺七郷納帳

八石八斗九升八合同郷佃(畑)共,	鳩原郷
四石六斗三合八夕	太井
五斗五升二夕	小深
一石六升	石見川
十石五斗九升一合二夕	上岩瀬
七石七斗六升二合五夕	下岩瀬
廿二石九斗二升六合	＜上岩瀬下岩瀬, 正作＞
五斗七升	同郷畠地子
六石一斗二升三合四夕	小西見
四石六斗三升八夕	下司給
二石九斗四升二合二夕	公文給
七石七升五合	諸闕所
五斗四升一合五夕	雑穀
六斗六升	定使給
六石九斗一升四合五夕	＜毎年三月勅会＞十講料
七石三斗五升七合一夕	＜毎年三月＞三千座

已上九十三石二斗六合二夕

同下用

十三石	御誕生日大般若新十二ヶ月下用
三石六斗	観音日仏供祈
卅二石	卅二人寺僧供米
三石	一膳徳 両年預給共
十二石六斗八升	承仕十二人供米
五斗	神事猿楽禄物不足二出之
二石五斗	賀利帝供 霜月十六日より卅二人修之
六石九斗一升四合五夕	勅会三月十講
七石三斗五升七合一夕	三月三百座

已上八十一石五斗五升一合六夕

残十一石六斗五升四合六夕<sup>36)</sup>

この「観心寺七郷納帳」によれば、中世末の膝下七郷からの収入は93石2斗6合2夕である。この収入は、観心寺の公的な法会の費用等に充てられ、出仕する学侶に対しても供米等として配分された。なお学侶を支える経済基盤は、この観心寺領以外に個々に所持する坊領があったが、『観心寺文書』は公的な寺家文書のみであり、学侶の坊領に関する私的な文書が含まれず、したがって坊領に関しては明らかにできない。また現在の『観心寺文書』は学侶方の文書であり、禅衆方の文書は散逸し現存しないため、禅衆方の寺領・坊領についても把握できない。

#### 4 観心寺の学侶と禅衆

中世後期、独自の武力を形成して勢力を拡大する根来寺とは異なり、観心寺は室町幕府・守護権力の安堵保証の下に、小規模な膝下観心寺郷の支配を固めた地域領主であった。両寺の地域領主として差異を考える上で、構成する寺僧集団の検討は不可欠である。すでに根来寺については、地域の新興勢力が行人方として寺内に坊をか

まえ、寺院経済や武力の中核を担うようになることは指摘されている。そこで、以下観心寺の寺僧集団について検討する。

中世後期の観心寺寺僧は学侶と禅衆の2つ僧衆から構成され、禅衆は自らは禅衆と名乗るが、学侶からは下僧と呼称されていた。この禅衆が、根来寺では巨大化した行人に当たる。なお前述したように『観心寺文書』は学侶方の文書であるため、文書に現れる禅衆は、学侶からみたものとなる。

そこで学侶と禅衆の人数について検討する。まず学侶の人数については、文安5（1448）年5月3日「観心寺満山衆会評定連判状」<sup>37)</sup>の署名者数からみておきたい。

#### 史料20

文安五年<戊辰>五月三日満山一同衆議評定曰、

右謂者、寺領郷内百姓等族寺僧交衆之事、往古雖有停止、近年猥為寺僧一分間、郷内政道評定参差相違之事出来者歟、所詮、就郷内之評議集会者、郷内之寺僧分参会可有停止、全彼之面々<仁>不可催集会者也、然上者、大小之年預勤仕之事、可被誂余人処也、就中、雖為郷内族、於守尊阿闍利・尊瑜大法師・源円大法師三人者、為已入之仁間、寺僧計者、以寛宥之儀、被免者也、於向後者、寺領百姓等之輩、任往古之掟、寺僧交衆堅可有停止処也、仍為後代、一味同心令連判状如件、

<五智院>成秀

兩年預

<持明院>宥金

快舜（花押）	賢秀（花押）
源応（花押）	円海（花押）
頼智	頼秀
源尊	快祐（花押）
金海（花押）	成秀（花押）
源可（花押）	教意（花押）
宥金（花押）	義海
守尊（花押）	尊瑜
祐盛（花押）	宥盛
尊澄（花押）	鏡秀
円秀	行海（花押）
源祐（花押）	快守
快意（花押）	源円（花押）
宗宥（花押）	宥源（花押）
良悟（花押）	快智
尊秀	澄尊（花押）

文安5（1448）年5月3日の「満山一同衆議」において寺領郷内の百姓と学侶との交衆が問題となった。支配側に立つ領主観心寺の学侶の内に、在地の一族と人的繋がりを持つ郷内の寺僧が存在することにより、支配上の課題が惹起したものとみられ、領主観心寺の支配の実態を知る上で興味深い史料である。その際満山一同として、快舜から澄尊までの32名が記載され、その内21名が同意の意を込めて花押を添たとみられる。したがって学侶の人数（坊数）は署名者の32名であったとみられる。

長禄2年（1458）3月18日の「観心寺惣山評定事書」<sup>38)</sup>においても、学侶総数32名を確かめることができる。

#### 史料21

（端裏書）

「募方奉行事書」

長禄二年<戊刀（寅）>三月十八（日脱か）惣山評定曰

一 募方奉行之事、寺僧卅二人之内、上六人末六人可被除之、中廿人内、上十人末十人、頭取可為兩奉行者也、就毎度寺僧之改替子細者、可被座付上下者也、若一年内、於有寺僧替事者、一廻内者雖寺僧別也、可有其座沙汰者也、但於渡米等者、秋米請取方候へハ、明年四月中、売代以可被渡者也、仍衆議如件

行海（花押）

年預

## 賢秀（花押）

史料21は、募方奉行の選び方についての規定に関するものであるが、史料上の寺僧は学侶のみを指し禅衆は含まれていない。学侶32人の内、上位・末位それぞれ6人を除き、残りの20人の内から上位10人・末位10人のグループのそれぞれ頭を奉行とするもので、やはり学侶の総数は32名であった。このように15世紀中頃の学侶の人数は32名であったと言えよう。

そこで、16世紀初頭の学侶の人数を検討するために、永正2年（1505）3月14日「観心寺学侶評議連判起請文」<sup>[39]</sup>をみておきたい。

## 史料22

永正二年<乙丑>三月十四日老若一同之評議曰

今度下僧憑公方之權威、可令入峯之由、企訴訟、然間、為老若一味同心、服天罰之神水、則加連判曰、

了海（花押）	照算（花押）	祐盛（花押）
信紹（花押）	俊雄（花押）	実海（花押）
秀算（花押）	鏝海（花押）	弘海
祐海（花押）	堯忠（花押）	宗実（花押）
杲照（花押）	承海（花押）	春海
忠雅（花押）	宥賀（花押）	宥仙（花押）
空鏝（花押）	宥舜（花押）	信海（花押）
良尊（花押）	宥真（花押）	実意（花押）
宥海（花押）	源金（花押）	雄吟
賢忠（花押）	頼成（花押）	竺誉
宥源（花押）	定秀（花押）	

## 天罰起請文之事

今度下有僧訴訟之由、自遊佐次郎左衛門尉殿、可令禅徒入峯由被懸申、於此段者、且背国務代々之御判之旨、且乱寺家往代之法度基曲事也、然間、於此一段之儀者、堅可為老若一味同心、万一漏衆議、存別心有仁体者、奉始 梵天帝釈四大天王、三界所有大小神祇、別者、当寺観音賀利帝西宮地主権現、勸請五所大明神之御罰、可蒙罷者也、仍起請文如件

<永正二乙丑>三月十四日

観心寺学侶一同

永正2年（1505）の「観心寺学侶連判状」の32名の名前が添えられており、学侶の総数は32名であった。すなわち中世後期を通じて観心寺学侶の定数が32名であったとみられる。

次に、禅衆の人数について検討する。応永15年（1408）2月7日の禅衆が学侶方へ提出した「観心寺下僧請文」<sup>[40]</sup>によれば、

## 史料23

（端裏書）

「下僧請文」

観心寺下僧等請文

於寺中止住之輩者、随被仰下之篇目、每事不可奉背寺家之貴命、若違背輩出来者、当其時、可令追放坊舎給者也。仍為後代龜鏡、禅衆等謹請文、如件。

応永十五年<戊子>二月七日

観徳（略押）	一音（略押）	行圓（略押）	力音（略押）	定観（花押）
行覚（略押）	道音（略押）	宗賢（略押）	覚音（略押）	覚善（花押）
観宗（略押）	浄円（略押）	良仙（筆軸印）	良覚（花押）	善観（花押）
良春（花押）	円観（花押）	観乗（花押）	教音（略押）	徳円（略押）
実音（略押）	覚円（略押）	覚定（花押）	観舜（花押）	俊善（花押）
行満（略押）	定順（花押）	善舞（略押）	乗本（略押）	定実（花押）
善俊（花押）	宗円（花押）			

請文に署名している禅衆は32名であり、15世紀初頭の禅衆の人数（坊数）は学侶と同数の32名であった。なお、この文書には、永正2年（1505）3月日の「禅衆交名」の追筆がなされている。永正2年（1505）にも学侶方に請文を出すために、禅衆が名を連ねたものと考えられる。

史料24

永正二年<乙丑>三月日 善行（略押）  
 教善（花押） 宗本（略押） 見喜（花押） 定善（略押） 禅覚（花押）  
 定音（略押） 観乗（略押） 覚善（略押） 賢覚（略押） 定舜（花押）  
 定円（略押） 長円（略押） 善泉（略押） 長覚（略押） 行円（略押）  
 円宗（略押） 行覚（略押） （1

永正2年（1505）に名を連ねた禅衆の人数は18名であり、応永15年（1408）の半数に減少している。半減した理由として、以下の史料25を掲げる。

史料25

一 於郷内催促之事

於年貢之無沙汰、私而使二人<マテハ>可有御付候、年預不及案内経候、

一 於下僧坊者、数十八限之、

此旨一定衆儀（議）了、

文明三年<辛卯>二月十七日

隆盛（花押）

年預

有源（花押）<sup>41)</sup>

史料25から文明3年（1471）2月17日の「学侶衆会評定」において、下僧坊（禅衆坊）が18に制限されたことがわかる。学侶は文明3年以前にも、禅衆が寺内で拡大しないように衆議で常に取り組んできた。

史料26

（端裏書）

「下僧坊舎不可建立状」

応永十五年<戊子>二月五日衆儀（議）曰

当寺禅衆等住坊造立事、於向後者、堅可被停止之、若於寺家存興隆以下之忠節之輩出来者、臨期可有惣寺之御計者也、<sup>42)</sup>

史料26の応永15年（1408）2月5日「学侶衆議」において、禅衆の住坊造立を停止したことが決められている。

このように、観心寺では16世紀まで学侶は32名（32坊）を維持するが、15世紀初期には学侶と同数の32名（32坊）であった禅衆は、文明2年（1471）には学侶の衆議によって18坊に半減させられた。その数は16世紀に至っても変わらない。その背景には学侶が寺院運営を主導していく上で、禅衆勢力の成長と独自の活動が危惧されたからではあるまいか。

## 5 禅衆の山伏行の禁止

『観心寺文書』にみられる中世後期の禅衆の独自の動きとして山伏行がある。観心寺は、役小角によって修験が開創されたという和泉・葛城山系にあり、「行」を活動の中心に置く禅衆にとって山伏行に取組むことは自然のようにも考えられるが、以下の史料27のように学侶から往古の禁制として山伏行は禁止されていた。

史料27

（端裏書）

「山臥請文」

山臥道事、当寺従往古堅為御禁制之上者、向後内不可立其道、不可交其衆、将又、就諸篇、可応寺家御命、若有違背之時者、永代被削跡、可預追放之御沙汰、仍為後代亀鏡之状、如件

応永十三年<丙戌>六月廿日

一音（花押）<sup>43)</sup>

応永13年（1406）に禅衆の1人一音が山伏行を試みたのであろうか、学侶の命に従い、違背した場合は観心寺を追放されても良いとする請文を提出した。

禅衆の山伏行は、前述の史料22の永正2年（1505）「観心寺学侶連判状」に「今度下僧憑公方之権威、可令入峯之由、企訴訟、然間、為老若一味同心、服天罰之神水、則加連判曰」と、禅衆の入峯、つまり山伏行によって引き起こされた事件によるものであった。「今度有下僧訴訟之由、自遊佐次郎左衛門尉殿、可令禅徒入峯由被懸申」と禅衆側から守護代遊佐に山伏行の訴訟が持ち込まれたことは、禅衆と守護方の武士とのつながりも想定され、ひとたび禅衆がまとまって学侶に対して抗争に至ると、それを留めさせることは学侶にとって容易ではな

かった。また観心寺の禅衆方の動きを利用する他の宗教勢力もみられた。明応3年（1494）に山伏の本山である天台宗園城寺聖護院門跡配下の乗々院から、御門跡入峯に奉公するようにとの文書が観心寺諸山伏中宛てに届いている。

史料28

当寺之事，依為葛城靡専両峰修行，就 御門跡様入峰等，被致奉公処，中古留入峰，無音被申条，為如何儀候哉，曲事候，但於有別儀之子細者，以修驗一味之儀，具有様可被申明之由，乗、院御房御奉行所候処也，仍執達如件，

明応三

小奉行

拾月十日

慶俊

河弼

観心寺諸山伏中<sup>44)</sup>

史料28の「観心寺諸山伏中」とは、おそらく観心寺の禅衆を指すのであろう。天台宗園城寺聖護院門跡は、当時根来寺行人にも働きかけ、明応元年（1492）に根来寺行人は聖護院門跡から綾袈裟の許可を得ている<sup>45)</sup>。このように、天台宗の聖護院門跡が、禅衆の山伏行を媒介に、真言宗の観心寺に対して支配を及ぼそうとしてきているとみられる。

観心寺学侶は、このような動きを見せる禅衆に対して、守護の禁制によってその優位性を保ってきた。

史料29

禁制

- 一 於寺家并寺領，当方軍勢不可致乱妨狼藉事
- 一 同寺中，剪取竹木事
- 一 於下僧者，為寺家計不可有公方綺事

右，此寺者，為御祈禱之間，此条々堅令制禁之處也，若有違犯之輩者，就名字注進，可処罪科之状如件，

「遊佐明叟」（押紙）

応永十三年八月十五日

沙弥（花押）<sup>46)</sup>

史料30

禁制

観心寺

- 一 於寺家并寺領，当方軍勢不可致乱妨狼藉事
- 一 同寺中，剪取竹木事
- 一 於下僧者，為寺家計不可有公方綺事

右，此寺者，為代々御祈禱之間，此条々，堅令禁制之處也，若有違犯之輩者，就名字注進，可処罪科之状如件，

寛正貳年卯月廿七日

右衛門佐（花押）<sup>47)</sup>

（畠山義就）

史料31

禁制

観心寺

- 一 於寺家并寺領，当方軍勢甲乙人濫妨狼藉事
- 一 同於寺中，伐取竹木事
- 一 於下僧者，為寺家計，不可有公方綺事

右，此寺者，為代々御祈禱之間，此条々堅令禁制者也，若有違犯之輩者，就名字注進，可処罪科之状如件，

延徳三年十二月六日

基家（花押）<sup>48)</sup>

史料32

禁制

観心寺

- 一 於寺家并寺領，当方軍勢甲乙人濫妨狼藉事
- 一 同於寺中，伐取竹木事
- 一 於下僧者，為寺家計，不可有公方綺事

右，此寺者，為代々御祈禱所之間，此条々堅令禁制者也，若有違犯之輩者，就名字注進，可処罪科之状如件，

永正元年七月十八日

上総介＜在判＞<sup>49)</sup>

禅衆の山伏行の禁制など、学侶による禅衆への支配は、守護権力の権力の保証のもとで維持されてきたと言え

よう。

## おわりに

中世後期、中央権門寺院による荘園制支配と併さった地域寺院への本寺末寺支配が、動揺し解体していくことに対して、地域寺院がいかに対応をしていくのかを、和泉・葛城山系の河内国観心寺を対象に検討してきた。そこで明らかになった中世後期の観心寺は、同じ和泉・葛城山系に存在する根来寺とは全く様相が異なる地域寺院であった。

すでに、研究蓄積の豊富な根来寺は、和泉・紀北地域の新興勢力の殿原層を行人方に吸収し、守護権力とも十分に対抗できる武力を擁する地域寺院領主として成長した。

しかし、本稿で検討した観心寺は、中世後期を通じて、寺領安堵を室町幕府・河内守護の権力に依存し、寺領も膝下地域に限定した。中核の寺領は、膝下の観心寺七郷と寺元郷からなる観心寺郷（観心寺庄）であり、根来寺のような和泉・紀北への拡大路線はとられていない。むしろ「観心寺七郷地頭・領家両職半分」「観心寺庄下司・公文両職」「観心寺郷段銭以下臨時課役并検断等の免除」など、観心郷の荘園諸職を集積し、他の領主権力を排除する一円支配をおこなった。膝下のわずかな寺領に経済的基盤を求めた政策と言えよう。

寺僧集団の構成においても根来寺と全く異なっていた。根来寺は新興勢力が行人方として寺僧になり、巨大化する根来寺の原動力となった。寺内運営においても行人方が大きな力を持っていた。しかし観心寺では、学侶が寺内運営の実権を掌握し、根来寺の行人にあたる禅衆を支配し統制していた。とくに15世紀半ばには、学侶の衆議によって禅衆坊が32坊から18坊に半減された。また、禅衆の宗教活動としての山伏行（峯入り）も学侶から否定された。このような学侶による禅衆への強力な統制の背景には、禅衆勢力が一致団結して抗争すれば、学侶のみにおいては対応し難く、高野山金剛峯寺や守護勢力の支援を得て可能となっていた。

以上、荘園制支配の動揺、中央権門寺院（本寺）の本末支配の衰退の中で、地域寺院のあり方は、自己権力による拡大路線をとる根来寺に対比して、守護権力依存による現状維持路線をとる観心寺というように一様ではない。その差はいかなる要因があるのであろうか。まず第1に地域の新興勢力の受け皿的組織として地域寺院が機能したかどうか。第2に守護権力の差異 第3に地域の経済的な、地理的な環境の相違などが考えられるが、今後の課題としておきたい。

## （注）

- 1) 小山靖憲『中世寺院と荘園制』（塙書房、1998年）の「第2部大伝法院根来寺」。『和歌山史研究』7（1980年）。『和歌山県立博物館 研究紀要』8（2002年）。『和歌山地方史研究』22（1992年）。『同』50（2005年）。東浦直也「中世根来寺の興隆」『鳴門史学』（2013年）。なお研究が多いため、特集としてくまれた研究雑誌を中心に上げた。
- 2) 本稿の研究にあたっては、史料については『河内長野市史』第4巻 史料編1（1972年）によった。なお、『大日本古文書 家分け 観心寺文書』も参考にした。また『河内長野市史』第1巻下本文編（1997年）観心寺も参考にした。
- 3) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書12, 大日本古文書『観心寺文書』123。
- 4) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書28, 大日本古文書『観心寺文書』86。
- 5) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書39, 大日本古文書『観心寺文書』40等。
- 6) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書38, 大日本古文書『観心寺文書』15等。
- 7) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書162, 大日本古文書『観心寺文書』130。
- 8) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書163, 大日本古文書『観心寺文書』131。
- 9) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書164, 大日本古文書『観心寺文書』132。
- 10) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書174, 大日本古文書『観心寺文書』136。
- 11) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書175, 大日本古文書『観心寺文書』137。
- 12) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書176, 大日本古文書『観心寺文書』138。
- 13) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書177, 大日本古文書『観心寺文書』133。
- 14) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書206, 大日本古文書『観心寺文書』180。

- 15) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書218, 大日本古文書『観心寺文書』188。
- 16) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書214, 大日本古文書『観心寺文書』186。
- 17) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書273, 大日本古文書『観心寺文書』170。
- 18) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書325, 大日本古文書『観心寺文書』209。
- 19) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書362, 大日本古文書『観心寺文書』577。
- 20) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書397, 大日本古文書『観心寺文書』223。
- 21) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書218, 大日本古文書『観心寺文書』188。
- 22) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書220, 大日本古文書『観心寺文書』189。
- 23) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書223, 大日本古文書『観心寺文書』567。
- 24) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書270, 大日本古文書『観心寺文書』167。
- 25) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書273, 大日本古文書『観心寺文書』170。
- 26) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書267, 大日本古文書『観心寺文書』164。
- 27) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書266, 大日本古文書『観心寺文書』163。
- 28) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書322・323・324・325, 大日本古文書『観心寺文書』206・207・208・209。
- 29) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書366・360・361・362, 大日本古文書『観心寺文書』581・575・576・577。
- 30) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書399・394・395・397, 大日本古文書『観心寺文書』219・220・221・223。
- 31) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書433・435・437・434, 大日本古文書『観心寺文書』231・234・236・233。
- 32) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書512・515・514・513, 大日本古文書『観心寺文書』246・249・248・247。
- 33) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書441, 大日本古文書『観心寺文書』380。
- 34) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書519, 大日本古文書『観心寺文書』384。
- 35) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書353, 大日本古文書『観心寺文書』125。
- 36) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書352, 大日本古文書『観心寺文書』124。
- 37) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書232, 大日本古文書『観心寺文書』507。
- 38) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書264, 大日本古文書『観心寺文書』508。
- 39) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書372, 大日本古文書『観心寺文書』521。
- 40) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書167, 大日本古文書『観心寺文書』490。
- 41) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書282, 大日本古文書『観心寺文書』498。
- 42) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書166, 大日本古文書『観心寺文書』484。
- 43) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書157, 大日本古文書『観心寺文書』489。
- 44) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書334, 大日本古文書『観心寺文書』572。
- 45) 『大乘院寺社雑事記』明応元年8月22日条。
- 46) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書158, 大日本古文書『観心寺文書』129。
- 47) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書266, 大日本古文書『観心寺文書』163。
- 48) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書322, 大日本古文書『観心寺文書』206。
- 49) 『河内長野市史』第4巻 史料編中世 観心寺文書366, 大日本古文書『観心寺文書』581。

# **The Dominance of Kansinji Temple, a Regional Temple, in Kawachi in the Latter Half of the Middle Age**

OISHI Masaaki

In the latter half of the middle age, the dominance by the power of the central feudal lord weakened. How were the regional temples to change then? This question has led me to the investigation of Kansinji Temple in Kawachi. Kansinji Temple centralized in the local temple estate while depending on the protective power, kept emergent factions from invading the estate, and maintained the conventional management of the temple by the student priests. This is a change rather different from the case of Negoroji Temple which, though existing in the same Izumi–Katsuragi mountain system as Kansinji Temple does, consumed the emergent factions in the neighboring areas and expanded its power.